

拒食・過食傾向と自己像，身体像，性役割に関する展望

——関係性の視点から——

東京大学教育学部教育心理学研究室 鈴木 真理江

Review of Studies on the Relationships between Anorexia Nervosa,
Bulimia Nervosa Tendency, Self Image, Body Image, and Sex-role.

Marie SUZUKI

In this study, the researches on relationships between anorexia nervosa, bulimia nervosa, self image, body image, and sex role were reviewed. The etiology of eating disorder has been said to be multidimensional. We need to consider the relationships between these factors which constitute the multidimensional model.

目 次

- I. 本論文の目的
- II. 摂食障害と身体像
 - A. 摂食障害と身体像
 - B. 自己像と身体像
- III. 摂食障害と自己像
- IV. 摂食障害と性役割

I. 本論文の目的

近年増加している摂食障害や拒食・過食傾向については、多様な側面の先行研究がある。まず自我同一性の葛藤 (Bruch, 1974), 公的自己意識 (Striegel-Moore, Silberstein, & Rodin, 1993) 等は摂食障害と重要な関連を持つことが指摘されている。

次に、他の疾患と比べて摂食障害に特徴的な側面として、身体との関連が挙げられよう。痩せ願望と摂食障害との関係は多く指摘されており (馬場, 1985), また身体像 (Body Image) の研究も行われてきている (Hsu & Sobkiewicz, 1991他)。

そして摂食障害に関する病因論は、①近年の増加の理由、②女性の疾病率が男性よりはるかに高い理由、という2つの疑問に答えられる様な包括的なものが求められているという (越川・根建・上里・今村・熊野・末松, 1992)。2番めの疑問の男女差の疑問に答える一つの視点として、性役割が挙げられる。実際、摂食障害と性役

割に関する研究は数多くある (van Strien & Bergers, 1988他)。

更に、摂食障害の原因論は多次元であるとの示唆がなされてきている (Vandereycken & Meermann, 1984)。しかし各論として各々の要因を考察するだけではなく、もう一步進めてそれらの多次元の要因同士の相互関連を見直し、疾患にどのように影響しているかを考えることが必要であると思われる。それらの要因の関連を見ていくことで、例えば、摂食障害に陥るか、その傾向でとどまるのかの差異も見なおすことができ、予防や治癒に関する示唆にもなると考えられる。そこで本論文では、以上の様な、摂食障害における自己像、身体像そして性役割と、更に、これらの相互の要因の「関係」も視野に入れて先行研究を概観し、今後の課題を考察することを試みる。

II. 摂食障害と身体像

A. 摂食障害と身体像

まずHsu & Sobkiewicz (1991) は身体像の研究の概観を行なっている。従来の身体像の研究は、①投影的方法、②質問紙法、③視知覚実験法に大別出来る (秋山・藤本, 1990)。Hsuらによると、視知覚実験法の研究では、神経性食思不振症 (anorexia nervosa : いわゆる拒食症) 群の中でも健常群に比べて過大評価する人もいれば、そうでない人もいる、という結果が得られている。神経性過食症 (bulimia nervosa) に関しても同様に結

果は一貫していなかった。さらに身体に対する態度、感情に関する研究において、anorexia, bulimiaは健常群に比べて身体への不満・痩せ願望が高かった。しかし全ての臨床群が身体への不満・痩せ願望が高い訳ではなく、また健常群においても身体への不満を示す人もいるという結果を得ている。

身体サイズへの過大評価 (overestimation of body size) に関する先行研究の結果は一貫していない。認知的な評価 (身体がどのように考えられているか) と情緒的評価 (身体がどのように感じられているか) では、結果も大きく異なる (Huon & Brown, 1986)。また1セッションの操作的介入によっても身体評価は変わるという (Norris, 1984)。このことはSlade (1994) も述べているように、摂食障害群の身体像は堅固な、歪んだものというより、むしろ不確かで、不安定、そして弱い (weak) 可能性も示している。つまり先行研究の条件による結果の一貫性の欠如そのものが、摂食障害における身体像の状況による不安定さを示唆しているとも考えられる。更に考察をすすめれば、自己概念、身体像の不明瞭さにより、外部の情報に影響されやすくなり、またすがりやすくなり、痩せ願望、他者の期待等「取り込んで」しまうのではないか。

Hsuら (1991) は、身体サイズへの過大評価という概念は摂食障害をよりよく理解する上で有用ではなかったと主張している。過大評価の意味が不明瞭であるし、個人にとっての意味も様々だと考えられる為である。健常群で過大評価を示している人でも摂食障害に至らない要因を探ることが今後の課題であると述べている。そういった意味でも、過大評価以外の要因、すなわち自尊心、性役割等との関連を調べることも有意義であろう。Hsuら (1991) は身体サイズへの過大評価よりも身体への態度、感情について、今後の研究を進めていく必要があると述べている。これはすなわち、本論文でも強調したように身体像だけでなく他の要因との関係を調べていくこと、また身体像の過大評価以外の側面の研究の必要性を示している。身体への態度、感情に関する研究としては、越川ら (1992) は、体型に関するイメージと不合理な信念における性差に関する調査を行なっている。この研究では、視覚的な身体像に対してSD評定により情緒的意味付けを調べた。Steinhausen & Vollrath (1992) もSD評定により身体像を評定させた。また鈴木 (1993) も「痩せている人のイメージ」という教示で性役割項目がどれくらい当てはまるかに関して調査を行なっている。このような研究に加えて、さらに今後は、身体に対する態度、感情と自己像との関係の仕方にも焦点を当てた研

究が望まれる。

身体サイズへの過大評価に関する研究結果の一貫性の欠如は、測定方法の違いや、摂食障害に特徴的な不安定で弱い身体像の性質、そして他の要因の影響を充分考慮していない為に依ると言える。また身体への態度・感情に関する研究の重要性も示唆された。

B. 自己像と身体像

次に自己像と身体像との関連を扱った研究を取り上げる。Schupak-Neuberg & Nemeroff (1993) はbulimia nervosaにおける自我同一性の障害と自己統制との関係について、「自己としての身体」という比喩的な視点に関して示唆している。すなわちbulimiaでは、明確な自己感覚が欠如している為、身体を自己定義と統制の手段として用いているというのである。bulimia nervosaの診断基準では、体重、食事にまつわること、その他人格に関わる問題が挙げられている。これらの問題の根底には、自己感覚の弱さ、障害があるのではないかとSchupak-Neubergらは指摘している。同一性の障害を仮定すると、気晴らし食い (binge eating) や食べた物の排出 (purging) が何故起るのか。Schupak-Neubergらは食物が、情動の統制の手段として用いられていると主張する。だが、気晴らし食いや食べた物の排出の、情動の統制という機能に関しては、どのようにそれが起るかについての理論的説明を欠くことも、指摘している。そこでSchupak-Neubergらは自己を身体と同等のものともみならず傾向に基づいてこれを説明することを試みた。つまり身体の統制の破綻は脆弱な自我の為に、自己の統制の破綻を意味し、益々自己からの回避がおり、過食に至ると言うのである。

この手段の有効性の程度は、自己を身体と同等に考える程度に依る、と彼らは考えている。自己同一性障害は、非効果的なcopingと結びついて自己からの逃避に至るが、飲酒や薬物依存と異なり、摂食障害に特徴的な側面として自己を身体と同等のものともみならずことがある、と彼らは述べている。

この説と、後述するHeatherton & Baumeister (1991) の説 (気晴らし食いを自己意識 (self-awareness) からの回避と考えること) との類似性を、Schupak-Neubergらは示唆している。つまり彼らの主張は、Heathertonらの自己意識からの回避に、身体と自己との密接な結びつきという視点を加えたものであると考えられる。しかし彼ら自身も述べているように、自己を身体と同等のものともみならず、ということとは直接には調べられてない。以上のことから、自己と身体の特徴的

な関係の仕方, 身体への感情に関する実証研究が今後の課題の一つであろう。

一方, Ben-Tovim & Walker (1991) は, 身体に対する女性の態度を測定する尺度の研究の概観を行っている。この中で, Ben-Tovimらは, 身体に対する満足度に研究の焦点を合わせることが, 身体への態度に関する幅広い調査から実証的に得られた知見というよりも, 研究者によって作られた視点であると述べている。そして女性が実際に自分の身体をどのように感じているかを, より理解する為には洗練された尺度の作成が重要であると示唆している。また自尊心と身体への満足度とが密接に関連していることは, ボディカセクシススケールによる結果でも示されているが, 満足度以外の領域に関して調査されるようになってきたのはつい最近の傾向であり, 尺度の洗練は今後の課題であると述べている。

さらにRyle & Evans (1991) は, 身体に対する知覚とその歪みに関する研究結果は一貫せず, 知覚の歪みよりも意味付け, 評価の歪みの方が多いに適切であるとして, 体重に対する健常者と摂食障害者の個人的意味付けを, repertory gridを用いて比較を行なっている。Ryleらの用いたrepertory gridは自己と身体イメージのgridであり, 食事や体重に関する個人的意味付けについて調査している。中でも食後と食前とでは前者の方が身体イメージが低いという結果は, 身体への感情の不安定さを示していると考えられる。また平均以上の体重よりも平均体重の身体へのネガティブな同一視が, 摂食障害群には見られた。このことは, 健常群における体重恐怖(weight phobia)と摂食障害群におけるそれとの違いの一端を示したのではなかろうか。

Slade (1994) も, 身体イメージは単純な知覚的現象ではなく, 多くの要因の影響を受ける複雑なものであると述べている。身体イメージに影響する要因のモデルを提唱し, 過去の体重の変化, 文化社会的規範等少なくとも7つの要因の影響を受けると指摘している。研究にあたってはこの複雑な要因を加味した上で行なう必要があると述べている。

さて, 面接技法による身体イメージの調査は, 現在のところ臨床群に関する研究に基づいたものである(Ben-Tovim & Walker, 1991)。だが多くの健常群を視野にいた面接技法も今後必要であると思われる。Ben-Tovimらが指摘した様に, “女性が実際に自分の身体をどのように感じているかをより理解する”(p.155) 為には, 健常群においても面接技法によってより柔軟性のある調査を行い, 臨床群との比較を行なうことにより, 臨床群と健常群との差異, 焦点を当てべきところが実

証的に浮かびあがってくる可能性がある。特に身体に対する感情, 身体と自己の関係が今後の課題であるとする, そういった微妙な側面については面接技法は有用であるといえる。

この様に, 摂食障害に至るプロセスを理解する上でも, 身体と自己の特徴的な関係を捉える調査が必要であると考えられる。また身体像を捉える尺度の洗練も今後の課題であろう。更に身体像への様々な要因を加味した研究が望まれる。

Ⅲ. 摂食障害と自己像

Forston & Stanton (1992) は自己不一致理論(self-discrepancy theory ; Higgins, 1987)を用いて, 健常群におけるbulimiaの症状の理解を試みている。結果として, 現実-理想自己のずれ(容姿に関連する属性のみ)とbulimia傾向との関連が示された。また自己評価の現実自己と母親からみた理想のずれとbulimia傾向が関連していた。また自己評価の現実自己と父親からみた当為自己とのずれは不安と関連していた。このように摂食障害における母子関係, 父子関係の重要性への示唆が挙げられている。

またStriegel-Moore et al. (1993) は, 社会的自己, 身体評価とbulimiaとの関係を見いだした。健常群において, 身体評価と社会的不安, 公的自己意識とは負の相関が見られた。そしてbulimia群とbulimia傾向群は健常群に比べて公的自己意識と社会的不安が高かった。摂食障害群は一般に, 他者からどのように自分の身体が見られているか, どのように他者が自分を見ているかに強い関心をもっていると言われている(Striegel-Moore et al., 1993)。この説と彼らの研究結果は一致する。

先述のHeatherton & Baumeister (1991) は, 気晴らし食いを自己意識からの回避としてまとめている。そして気晴らし食いがどのように起るか, そのプロセスについて, 自己への気づきが低下することに由来するという視点を検討している。bulimiaの自己への注目の仕方を詳しくみると, 内的な感覚・状態への深い気づきには至らず, 逆に内的な状態に反応的ではない。そこで摂食障害における自己注目は, 内的な状態や感情ではなく, むしろ他者にどのように見られているか, 文化や個人的基準と比べてどのようにあるかといったことに焦点があると, Heathertonらは主張した。このことは身体への感覚についても当てはまると考えられる。従って身体や自己への感情に焦点をあてた研究も, 摂食障害の理解に役立つのではないか。

Heathertonらによると、気晴らし食いは自己への否定的な見方と関連していて、気晴らし食いをする人は社会的な存在としての自己に常に敏感だという。そして気晴らし食自体は自己注目の喪失によるとしている。すなわち気晴らし食いをする人は、他者の意見、評価、監視への強い感受性、セルフモニタリングにより食行動を抑制する。従って他者の存在から逃避し、食行動を監視するのを止める時に気晴らし食いは起りやすいと、Heathertonらは考えた。これらはそもそも未成熟な自我同一性(馬場・遠山, 1991)に関連すると考えられる。

Heathertonらによると、先行研究ではこの自己意識からの回避の視点を直接検証したものはない。従って自己意識からの回避の視点を実証することが今後の課題であると述べている。また臨床への適用として、気晴らし食いそれ自体ではなく、回避パターンを生み出す認知により焦点を合わせる必要があると述べている。臨床実践という観点からもこの自己意識という視点は興味深い。

また中村・東・大石・竹内・橋本(1984)はロールシャッハ法によるanorexiaの人格特徴に関して、Ego boundary scoreにより分析を行なっている。

このように全体として、自己像と摂食障害の関連の研究の流れとしては、摂食障害の起る「プロセス」をより詳細に理解しようとする方向になってきている。

Strauman, Vookles, Berenstein, Chaiken, & Higgins (1991)は自己不一致と身体への不満への脆弱性と摂食障害との関連の調査を健常群において行なった。現実自己と理想自己とのずれと身体への不満との関連、そして現実自己と理想自己とのずれと過食行動、現実自己と当為自己のずれと拒食行動との関連が見いだされた。

自己不一致理論(Higgins, 1987)は、現実自己、理想自己、当為自己の3つの自己像を仮定としている。この内、理想自己、当為自己は自己指針として機能するとされる。そして自己指針の強さにおける性差と摂食障害との関連についても述べている(Higgins, 1991)。それによると、自己指針の差は養育者との関係に関する性差に影響されるという。女子は男子よりも行動の統制を期待される。そのため、男子の方が問題行動や反社会的問題行動が幼児期には多い。反対に身体への不満や食行動の問題は過度の統制を含んでいるので、摂食障害は女子に多いという。性差の問題に関して興味深い理論である。

Higginsが主張するように、自己像については自己のどの側面、視点と食行動が関連するか、区別して調べていく必要があるだろう。そのことが摂食障害の発症プロセスを説明することに役立つとも言える。

その例として、Steinhausen & Vollrath (1993)で

はanorexia nervosaの患者の自己像を、Offer Self-Image Questionnaire (OSIQ)によって測定している。衝動統制、情緒、身体像、対人関係、性への態度、そして精神病理の領域において、健常群の基準より低かった。入院による治療はある領域においては心理状態の改善を果たしたが、全ての自己像領域についてはなかった。

以上の様に、自己の様々な側面と摂食障害との関係が詳細に検討されつつあり、摂食障害のおこる過程を捉えるような研究の方向性になってきている。

IV. 摂食障害と性役割

まず性役割と摂食障害に関する研究の概観を行なう。

van Strien & Bergers (1988)は過食と性役割志向、そしてこれらの関係への不安と否定的自己像の影響について調査を行なっている。この研究で食行動と性役割以外に不安と否定的自己像を媒介変数として組み込んでいるのは興味深い。その結果、過食行動はステレオタイプの女性性特性への固執と関連が見いだされた。ステレオタイプの男性性特性との関連は見いだされなかった。更に不安得点と自己像得点の影響を統計的に統制すると、この関係は弱くなった。このことから女性性の過食への影響は、不安と否定的自己像に関連していると述べている。また摂食障害における性同一性の問題は、一般に女性にとってどの様なことが健康に生きるということか、という議論の視点からも理解され得るとvan Strienらは示唆している。

以上の様なことから、女性性が高いということだけではなく、例えば否定的自己概念や不安など他の要因との「関連の中で」理解を深めていく必要がある。女性性の高さにまつわる問題、受け止め方、男性性・両性具有性との葛藤等にむしろ焦点を合わせていくことで、発症の過程への示唆が得られるのではないかと。従って性役割も自己像など他の要因との関係の中でとらえていく必要があると考えられる。

次に、Xinaris & Boland (1990)は喫煙、飲酒、自己統制、性役割と摂食障害との関係を調査している。sex-role ideologyと摂食障害との関連は見られなかった。この結果はsex-role ideologyの尺度を用いた先行研究(Srikameswaran, Lechner, & Harper, 1984)とも一致している。Xinarisらによると、この結果はBoskind-Lodahl (1976)の、bulimia nervosaの女性は伝統的女性役割に固執するという知見や、Orbach (1979)の強迫的に食べる女性はステレオタイプの女性特性を拒否するという知見を支持していない。Xinaris

らは, sex-role ideologyではなく, むしろ性役割葛藤こそが摂食障害と結びついている (Rost, Neuhasu, & Florin, 1982), もしくは, 性役割意識というより全般的な社会的イメージが摂食障害と関連する (Davis, 1987) 可能性を示唆している。性役割行動, 信念, 葛藤, もしくは全般的な社会的イメージか, に関して今後はより明確にする必要があると思われる。

さらにLewis & Johnson (1985) ではBem Sex Role Inventory (Bem, 1981) を用いて, 性役割に関してbulimia nervosaと健常群との比較を行なった。その結果, 健常群の方がbulimia群に比べて女性性が高かった。またbulimia群は統制群に比べて一貫して性役割に関して低得点を示し, 結果として“未分化型”の分類に入った。この得点傾向は低い自尊心, もしくは不明確な自己感覚の現れとして理解出来るとLewisらは述べている。自尊心の高さも関係する為, 実際にどの程度女性的かのみではなく, 性役割をめぐる問題が何故, どのようにして食行動に影響するかを更に明らかにする様な実証研究が望まれる。

Cantelon, Leichner, & Harper (1986) では摂食障害の女性の性役割葛藤に関して調査を行った。先行研究では性役割葛藤に関して「直接」調査を行ったものは見られない。Cantelonらはこの性役割葛藤を理想と現実自己のずれ, そして性役割への満足度 (主婦, 妻, 恋人, そして女性としての役割への満足度) として捉えて, 調査を行っている。結果は理想と現実自己のずれとしての葛藤に関しては臨床群と統制群とでは有意な差は見られなかった。bulimia群はanorexia群や統制群に比べて性役割への不満が有意に高かった。このため, 摂食障害に特徴的な性役割葛藤が, Bem Sex Role Inventoryでは測定困難なことを示唆している。そして性役割葛藤の様な複雑な概念はより包括的な調査によって調べられる必要があると述べている。やはり性役割も他の要因との関連で捉える必要がある。

性役割葛藤に関する調査研究の幾つかは, 異なる結果を示している。Sitnick & Katz (1984) はsex-role identityとanorexiaとの関係を調べた。anorexia群の方が男性性得点が低く, 女性性得点については有意な差は見られなかった。これはanorexiaの女性性拒否説への挑戦であり, また摂食障害を発症しやすい女性の傾向の一つとして男性性を十分に発達させることが出来なかったことを示しているとSitnickらは解釈している。Orbach (1978) はanorexiaの女性は女性性役割を拒否し, また同時に過大視もしていると述べている。この拒否し, また過大視もしているという微妙な葛藤を捉える

ような調査方法の工夫が望まれる。またBrown, Cross, & Nelson (1989) はbulimia傾向のある女子学生のsex-role identityとsex-role ideologyに関して調査を行っている。その結果, bulimia傾向のある女子学生はbulimia傾向の低い女子学生に比べて伝統的女性性が高い傾向があった。

だがSrikameswaran et al. (1984) の調査では, anorexia群, bulimia群各々と統制群とではsex-role ideologyで有意な差は見られなかった。さらにSquires & Kagan (1985) は, 女子の大学生における性役割と食行動について調査を行った。この研究では, 強迫的に食べる行為 (compulsive eating) は伝統的に「女性的」であるとされる役割と行動に対する無意識な拒否を示している, という仮説を検証した。しかし結果は仮説と反対であった。強迫的に食べる傾向のある人は現在の自分の女性性を低く評価し, もっと女性的であることを望んでいた。逆にダイエットを行っている人は現在の自分の女性性を高く評価していたのである。

このような結果の違いについて, 方法論が異なることが原因の一部であろうとCantelonらは述べている。例えば女性開放に関して, bulimarexicsでは全体的な態度と実際の行動のずれが見られ, 統制群では見られなかった (Rost et al., 1982)。したがって摂食障害における「性役割葛藤」の中身をより詳細に見ていく必要があると思われる。例えば理想と現実自己とずれの葛藤だけでなく, 他の葛藤もあるのではないか。摂食障害に特徴的な性役割葛藤を, 臨床的知見のみではなく調査方法によって実証していくことも今後の課題と考えられる。

性役割と摂食障害との関係に関する研究結果の一貫性の欠如, 臨床的直感と研究結果のずれの要因としては, ①性役割尺度の問題, ②性役割以外の要因の影響がまず挙げられる。身体像と同様に, 多次元的な視点で摂食障害をとらえる必要がある。

(指導教官 近藤邦夫教授)

引用文献

- 秋山俊夫・藤本晴美 1990 身体像の測定に関する研究 福岡教育大学紀要, 39, 157-167.
馬場謙一 1985 3章 神経性食思不振症の症状 II 神経性食思不振症患者の示す精神症状 末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一 (編) 神経性食思不振症 その病態と治療 医学書院 Pp.69-83.
馬場謙一・遠山直孝 1991 第2章 神経性過食症の病因 II 病態心理の側面から 末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一 (編) 神経性過食症 その病態と治療 医学書院 Pp.30-45
Bem, S. L. 1981 The Bem sex role professional manual. Palo Alto,

- Ca : Consulting Psychologist Press.
- Ben-Tovim, D. I. & Walker, M. K. 1991 Women's body attitudes: A review of measurement techniques. *International Journal of Eating Disorders*, 10, 155-167.
- Boskind-Lodahl, M. 1976 Cinderella's step-sisters: A feminist perspective on anorexia nervosa and bulimia. *Journal of Women in Culture and Society*, 2, 342-356.
- Brown, J. A., Cross, H. J., & Nelson, J. M. 1990 Sex-role identity and sex-role ideology in college women with bulimic behavior. *International Journal of Eating Disorders*, 9, 571-575.
- Bruch H. 1974 *Eating Disorders*, Routledge & Kegan Paul, London.
- Cantelon, L. J., Leichner, P. P., & Harper, D. W. 1986 Sex-role conflict in women with eating disorders. *International Journal of Eating Disorders*, 5, 317-323.
- Davis, R. M. 1987 Current trends in cigarette advertising and marketing. *The New England Journal of Medicine*, 316, 725-732.
- Forston M. T & Stanton A. L 1992 Self-discrepancy theory as a framework for understanding bulimic symptomatology and associated distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 11, 103-118.
- Heatherton, T. F. & Baumeister, R. F. 1991 Binge eating as escape from self-awareness. *Psychological Bulletin*, 110, 86-108.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Higgins, E. T. 1991 Risks and trade-offs in self-regulatory and self-evaluative processes: A developmental model. In M. R. Gunner & A. Sroufe(Eds.) *Minnesota symposia on child psychology*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. Pp.101-138.
- Hsu, L. K. G. & Sobkiewicz, T. A. 1991 Body image disturbance : time to abandon the concept for Eating Disorders? *International Journal of Eating Disorders*, 10, 15-30.
- Huon, G. F., & Brown, L. B. 1986 Body images in anorexia nervosa and bulimia nervosa. *International Journal of Eating Disorders*, 5, 421-439.
- 越川房子・根建金男・上里一郎・今村一太・熊野宏昭・末松弘行 1992 体型に対するイメージと不合理な信念における性差 —— 青年期男女を対象として—— 早稲田心理学年報, 24, 55-63.
- Lewis, L. D. & Johnson, C. 1985 A comparison of sex role orientation between women with bulimia and normal controls. *International Journal of Eating Disorders*, 4, 247-257.
- 中村このゆ・東淑江・大石まり子・竹内和子・橋本やよい 1984 ロールシャッハ法による神経性食思不振症の人格特徴について —— Ego Boundary Scoreによる分析—— 厚生省特定疾患 神経性食思不振症調査研究班 昭和59年度研究報告書 239-246.
- Norrssi, D. L. 1984 The effects of mirror confrontation on self-estimator of body dimensions in anorexia nervosa, bulimia, and two control groups. *Psychological Medicine*, 14, 835-842.
- Orbach 1979 *Fat is a feminisit issue : The anti-diet guide to permanent weight loss*. New York : Paddington Press.
- Rost, W., Neuhaus, M., & Florin, I. 1982 Bulimia nervosa : Sex-role attitude, sex-role behaviour, and sex-role related locus of control in bulimarexic women. *Journal of Psychosomatic Research*, 26, 403-408.
- Ryle, A. & Evans, C. D. H. 1991 Some meanings of body and self in eating-disordered and comparison subjects. *British Journal of Medical Psychology*, 64, 273-283.
- Schupak-Neuberg, E. & Nemeroff, C. J. 1993 Disturbance in identity and self-regulation in bulimia nervosa : Implications for a metaphorical perspective of "body as self" . *International Journal of Eating Disorders*, 13, 335-347.
- Sitnick, T. & Katz, J. L. 1984 *International Journal of Eating Disorders*, 3, 81-87.
- Slade, P. D. 1994 What is Body Image? *Behavioral Research and Therapy*, 32, 497-502.
- Squires, R. L. & Kagan, D. M. 1985 Sex-role and eating behaviors among college women. *International Journal of Eating Disorders*, 4, 539-548.
- Srikameswaran, S., Leichner, P., & Harper, D. 1984 Sex role ideology among women with anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 3, 39-43.
- Steinhausen, H.-C. & Vollrath, M. 1992 Semantic differentials for the assessment of body-image and perception of personality in eating-disordered patients. *International Journal of Eating Disorders*, 12, 83-91.
- Steinhausen, H.-C. & Vollrath, M. 1993 The self-image of adolescent patients with eating-disorders. *International Journal of Eating Disorders*, 13, 221-227.
- Strauman, T.J., Vookles, J., Berenstein, V., Chaiken, S., & Higgins, E. T. 1991 Self-discrepancies and vulnerability to body dissatisfaction and disordered eating. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 946-956.
- Striegel-Moore, R. H., Silberstein, L. R., & Rodin, J. 1993 The social self in bulimia nervosa : public self-consciousness, social anxiety, and perceived fraudulence. *Journal of Abnormal Psychology*, 102, 297-303.
- van Strien, T. & Bergers, G. P. A. 1988 Overeating and sex-role orientation in women. *International Journal of Eating Disorders*, 7, 89-99.
- 鈴木真理江 1993 青年期女子における拒食・過食傾向と自己像 —— 性役割認知を中心に —— 日本教育心理学会 第35回総会発表論文集 366.
- Vandereycken, W. & Meermann, R. 1984 *Anorexia Nervosa : A Clinician's Guide to treatment*. Berlin : Walter de Gruyter & Co. (末松弘行(監訳) 1991 アノレキシア・ネルヴォーザ 臨床家のための治療ガイドブック 中央洋書出版部)
- Xinaris, S. & Boland, F. J. 1990 Disordered eating in relation to tobacco use, alcohol consumption, self-control, and sex-role ideology. *International Journal of Eating Disorders*, 9, 425-433.